

市立図書館関係団体向け
公共施設マネジメント勉強会
講演録

令和2年（2020年）2月4日（火）開催

場所：豊中市立岡町図書館 集会室

目 次

1. 開会あいさつ.....	1
2. 趣旨・状況説明.....	1
3. 講義	5
テーマ：公共施設を取り巻く課題とこれからの公共施設マネジメント	
講師：池澤 龍三 氏	
一般財団法人建築保全センター保全技術研究所第三研究部次長	
4. 質疑	17
5. 閉会～アンケート記入.....	26

【配布資料】

- 資料1 （仮称）中央図書館基本構想について
- 資料2 市立図書館に関するアンケート調査結果
- 資料3 講義資料
- 参加者アンケート

1. 開会あいさつ (司会)

お待たせいたしました。それでは定刻となりましたので「市立図書館関係団体向け公共施設マネジメント勉強会」を開会いたします。本日はご多忙の中お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。本日司会を務めさせていただきます教育委員会事務局読書振興課の大平と申します。よろしくお願いいたします。

それではまず、お手元の資料の確認をさせていただきます。(他、会の注意事項など略) 開会に当たりまして、読書振興課長の須藤よりごあいさつを申し上げます。

(教育委員会事務局読書振興課長)

皆さま、こんにちは。本日はお忙しい中お越しいただきまして、どうもありがとうございます。また日頃から図書館との協働事業などを通じまして、さまざまな分野で力をお貸しいただき、ありがとうございます。現在、豊中の図書館は図書館協議会から得た意見書を踏まえまして、今年度末までに(仮称)中央図書館基本構想の骨子を作成し、令和2年度末までに基本構想を策定することを予定しております。現在までには、アンケート調査結果等の分析や、短期間ではありますがコンセプトを考えるための職員によるプロジェクトチームの立ち上げなどに取り組んで参りました。

図書館は、今本当に変化の時期にあると考えております。これからより良いかたちに変化していくよう、市民の方々とともに情報を共有させていただき、構想策定に向けて取り組んでいきたいと思っております。そのため、施設全体の再編、新たなネットワークづくりに向けて必要な施設マネジメントに関する情報提供の場として、この勉強会を開催させていただきました。これまで皆様とともに培ってきた図書館サービスを、どのように次のステップにつなげていくかも含めて、来年度末の構想策定に向けてともに考えていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

2. 趣旨・状況説明 (教育委員会事務局読書振興課)

続きまして、(仮称)中央図書館基本構想策定の概要について、説明させていただきます。資料1をご覧ください。まず、「(仮称)中央図書館基本構想策定の目的」です。今お越しいただいている岡町図書館は、築後約50年となっています。それ以外にも豊中市の多くの公共施設では、順次更新の時期を迎えております。そのため、豊中市全体で「豊中市公共施設等総合管理計画」を策定しておりまして、それに基づき今後はいろいろな施設を更新していくことになります。詳しくは参考資料「豊中市公共施設等総合管理計画」をご覧ください。

岡町図書館を建替えなければならないということもありますし、今後の社会状況の変化や多様な年代の市民のニーズにも対応するべく、中央図書館機能というものを構築します。その中央図書館を核とした施設配置や、分館も含めた図書館全体の再編に向けた指針とするため、令和2年度中に「(仮称)中央図書館基本構想」を策定することになっております。

現時点では中央図書館の建設場所は未定で、岡町図書館を建て替えて中央図書館とすることは、場所的にもいろいろ無理だということだけが分かっています。「(仮称)中央図書館基本構想」の策定に向け、どのような論点で進めていくかということをも3つ挙げております。1つ目はこれからの図書館サービスのあり方や注力すべき取組み、2つ目は施設配置に関する基本的な考え方、3つ目は中央図書館の機能です。これから1年程かけて、構想としてとりまとめていくことを予定しています。

構想策定の時期は令和3年3月を予定しております。構想の策定に向けたこれまでの取組みを資料の4枚目に挙げております。豊中市立図書館協議会で平成29年から中央図書館の機能について審議していただきまして、平成31年3月に「豊中市立図書館における中央図書館機能について」という意見書にまとめていただいております。

令和元年度には市民アンケートというかたちで無作為抽出による郵送調査と、来館者アンケートというかたちで図書館に来られた方向けのアンケート調査を行っております。また、庁内関係各課の担当者が集まり、「(仮称)中央図書館基本構想策定委員会」という庁内委員会を開催しております。これらの取組みに基づき、今年度は構想の骨子を作成しております。

来年度は構想策定の年度ですが、現時点で予定していることが資料の5項目目です。図書館についていろいろな知識をお持ちの有識者の方々の意見をお聞きすることと、市民向けにワークショップを開催することを予定しています。ワークショップの開催場所は岡町図書館等で、参加者を募っているところとご意見をいただくことになるかと思っております。今年度に引き続き、「(仮称)中央図書館基本構想策定委員会」という庁内委員会も開催します。そして、フォーラムとして構想素案などを公表する場を設け、最終的な策定の前にはパブリックコメントとして市民意見を公募することも予定しております。

本日お集まりいただいております各団体の皆様には、日頃より活動を通じて図書館の運営にご協力いただいております。誠にありがとうございます。深く感謝申し上げます。構想の策定に当たりましては、より良い図書館サービスを提供できるよう、皆様のご意見をお聞きしながら、今後の図書館のサービス更新や施設の再編方針など検討していければと考えております。

アンケート調査については、しっかりとした分析にまでは至っていませんが、簡単にご紹介させていただこうかと思っております。資料2をご覧ください。2つのアンケート調査を行いました。まずは「市民アンケート調査」です。無作為に15～89歳の方3,000人を抽出して郵送しました。宛先不明などで戻ってきたものを除いて、2,986人の方に到達しましたが、戻ってきたのは829票でした。次に「来館者アンケート調査」を実施しました。これは市立図書館7館で、主に中学生以上の方にお配りしまして、1,995人の方をお願いして1,681名の方からご協力いただきました。

市民アンケートと来館者アンケートでは回答者数も全然違いますし、内容も違います。市民アンケートは設問数が多く、来館者アンケートはそれより減らしていますので単純な比較はできませんが、参考までに見比べていただきたいと思います。資料2を開いていただきますと、左側が市民ア

ンケートの結果、右側が来館者アンケートの結果となっております。設問は他にもたくさんありましたが、主に中央図書館とその他の図書館も含めた今後の施設のあり方に関する部分を抜粋して掲載しております。

全部をお話しすると時間が足りなくなりますので、一部ご紹介いたします。まず1・2ページです。こちらは、「中央図書館に機能を集約するに当たって、貸出・返却・予約といういわゆる一般的な機能以外で、尚且つ中央図書館以外の図書館で必要だと思われる機能を選んでください」というものです。「書架」や「閲覧スペース」を重視する方が多く、その次に多いのは「子どものスペース」「自習室」です。市民アンケート・来館者アンケートのいずれでも、若い世代向けの場所を望まれる方が多いという結果となっております。

少しとぼして、5・6ページ「中央図書館を作ったとして、そこであれば良いというスペースを選んでください」という設問です。どちらのアンケートでも「静かに読書できるスペース」が多いという結果となっております。

1つ申し忘れていましたが、市民アンケートと来館者アンケートで違いがあるとすれば、市民アンケートに答えてくださった方のうち48.7%は、過去1年間で図書館を全く利用されていない方ということです。来館者アンケートの対象は図書館に来られた方ということで、大半の方が2週間に1回以上来られる、よく利用されている方となっています。そこでまず大きな違いがございます。また、市民アンケートでは20・30代の若い方が数%多くなっており、そうした違いも多少は表れています。

話が一旦切れてしまい、申し訳ないです。中央図書館にあれば良いというスペースについては、「静かに読書するスペース」が多くなっています。そして、「小さな子ども連れでも気軽に過ごせるスペース」「飲食ができるスペース」なども多く選択されています。特に「飲食ができるスペース」は、今の豊中の図書館にはあまりないため、そうしたスペースを求める方もいらっしゃるのですが、両方のアンケートで見取れるかと思えます。

また少しとぼしていただいて、11・12ページ「中央図書館と同じ建物にあれば良いと思う施設をお選びください」です。例えば複合施設を想定した場合、どのような施設が入った方が良いかを聞いてみました。先程の「飲食スペース」という答えとリンクしていますが、「飲食施設」というお答えが両方のアンケートで多く出ております。他には「文化施設」「商業施設」も多くなっています。「商業施設」ではスーパーなどいろいろと考えられますが、図書館に行くついでにスーパーなどにも行くことができると便利というご意見と受け止めています。

その次の13・14ページは、「どんな中央図書館であれば利用してみたいと思いますか」です。これは市民アンケートと来館者アンケートの間で、若干差が出ています。来館者アンケートは、やはり2週間に1回以上来られる方が多いからか、「蔵書の充実」を重視される方が多くなっています。市民アンケートでは、「座席数が多くてゆったり過ごせる」「交通アクセスが良い」が多いようです。本を読むための過ごし方以外で考えますと、「小さな子ども連れでも気軽に過ごせるスペース」が

多く選択されています。

最後にご紹介したいのが 19・20 ページです。これは中央図書館に限らず「豊中市立図書館のこれからのあり方について、あなたのお考えに近いものをお選びください」という設問です。将来的にどういった方向で施設を維持していくのが良いかを聞きました。市民アンケートでは「駅前などに貸出返却のポイントを設置してほしい」が多くなっています。駅の構内や駅の近くで資料を返却したりできると便利ということかと思われます。また、「施設を集約し、サービス水準を維持」も多くなっています。「施設整備や管理運営に民間企業等を活用」を選んでいる方もいらっしゃいます。一方で、来館者アンケートでは「新たなサービスの導入よりも蔵書の充実を優先」が最も多く、やはり本をたくさん読まれる方が多いことが影響しているものかと思われます。左右でグラフを見比べていただくと、若干の差があるかと思えます。また、同じく来館者アンケートでは、「駅前などに貸出返却のポイントを設置してほしい」という便利さを求める声が多くなっています。他には、「現状のサービス・施設を維持してほしい」という意見も市民アンケートよりも来館者アンケートで多くなっています。市民アンケートでは過去 1 年間で図書館を使っていない方も多いため、そのあたりも大いに影響しているのではないかと思います。

以上、簡単ではございますが、市立図書館に関するアンケート調査結果として、市民アンケートと来館者アンケートの違いをご紹介させていただきました。

それではお待たせいたしました、これより一般財団法人建築保全センター保全技術研究所第三研究部次長でいらっしゃいます池澤龍三様より、「公共施設を取り巻く課題とこれからの公共施設マネジメント」をテーマにご講義いただきます。資料はお手元の資料 3 でございます。

池澤様は千葉県佐倉市職員などを経て、平成 25 年より現職に就かれていらっしゃいます。全国の自治体で経験・実績を踏まえたセミナーを精力的に行っておられ、公共施設マネジメントに関する著書も出されています。池澤様の著書や本日の勉強会のテーマである「公共施設マネジメント」に関連した資料を会場内に何冊か展示しておりますので、もしよろしければお帰りの際にでもご覧ください。一部お貸し出しできないものもありますがご覧いただければと思います。それでは池澤様、どうぞよろしく願いいたします。

3. 講義

テーマ：公共施設を取り巻く課題とこれからの公共施設マネジメント

講師：池澤 龍三 氏

一般財団法人建築保全センター保全技術研究所第三研究部次長

○池澤先生 皆さん、こんにちは。地声が大きいので、マイクはほとんどいららないかと思いますが、マイクを使わせていただきます。改めまして、ご紹介いただきました池澤です。どうもよろしくお願いたします。

最初に申し上げますが、堅苦しい話をするつもりは全くありません。ここの副題にもある通り、公共施設、いろいろな建物やインフラといわれている道路・橋梁等も含めて、全国の自治体様を中心に、どういった状況にあるのかを話していきます。本にも書きましたが、今後の課題への答えとして、こうでないといけないというかたちは、正直ありません。それぞれの自治体様自身が自治体様ごとに考えることだと思うので、正解は1つではないかと思っています。

先ほどご紹介いただいたように、以前は千葉県の佐倉市という人口 17 万 6,000 人の自治体の職員をしております、建築士です。佐倉市では建築士として設計をしながら、いろいろな部署を回りました。これから1時間ぐらい話をするので、前段として私の人となりを少し知ってもらうため、最初にそのことをお話しします。

地方自治体では、建築士として学校や図書館の設計もしました。あるいは区画整理といって、50ヘクタールぐらいのエリアで建物だけでなくまち全体のインフラを整備する業務に携わったこともあります。また、以前に姉齒事件があったかと思いますが、当時は違反指導をする係長でした。あなたいけませんよということを指導するなど、いろいろなことをしていました。

実は、公務員になる前は3年間民間のゼネコンにいました。大阪に本社のある大手のゼネコンです。ただ、大阪勤務ではなく、関東での採用・配属でした。資料の「龍」という字が筆字で書いてあるのは、奇をてらっている訳ではありません。千葉県佐倉市で3年間公務員をしていましたが、生まれも育ちも高知県です。それも、ずっと関西に思い入れがあり、親戚も池田市におります。高校生までは高知在住だったので、話し出すと土佐弁が出てくることもあります。よく分からないところがあれば、土佐弁だと思ってください。

私は昭和38年生まれ、私の両親は健在です。私の生まれた翌年に東京オリンピックが開催されたようです。1歳だったので全く覚えていません。まして高知の田舎に住んでいれば、オリンピックに行くこともありません。そうした時代に生まれ、なぜかは分かりませんが、また今年にはオリンピックがある年という巡り合わせのようです。

ちなみに私の子どもは一人娘で、もうお嫁に行きました。毎週末に帰ってくるので寂しくはありません。何が言いたいかというと、典型的な3世代の真ん中の世代だからこそ、上の先輩方のこと

も見てきて分かるし、いろいろな便利なことも享受させてもらってきたということです。私から娘たちを見ると、発想が全然違います。私の父親の時代には念のために持っておきましょう、万が一のために備えをしましょうという考えが強くありますが、私の娘たちはこわいくらいモノを持ちません。必要な時に必要なものがあれば良い、余計なものはいらないと、本当にモノを持ちたがりません。彼女ら、彼らの育った環境が、幸か不幸か分かりませんが、いろいろなものが潤沢にあるという割には、実はそれが全て手に入った時代でもありませんでした。それで必要なものだけあれば良い、という時代なのかもしれません。

そういう意味で、狭間の世代にあたる私が、社会全体で抱えている課題を提供させていただき、この1時間で皆さんに「今はこういう状況なのか」ということをつかんでいただければと思います。これから市の方といろいろと計画を作っていく時には、批判をするのではなく、「自分だったらこうだけだな」とアイデアをどんどん出していただけるとありがたいなと思って話します。

ここからは少し堅苦しい話で、難しい言葉がいっぱい並びますが、皆さんは普段本を読まれるから大丈夫でしょう。余談ですが、私は本をあまり読まなかった方です。勉強の本は仕方なく読みましたが、それ以外はなかなか読む気になれませんでした。唯一、大学受験の時に司馬遼太郎さんの「竜馬がゆく」を読みました。30年前なので、高知から朝一に出て行かないと東京へたどり着けません。今は2時間程度です。千葉大学を受験したのですが、昼前の電車に乗らないと高知へ帰れず、途中で高松に泊まらないといけないうらいの時代でした。その時に「竜馬がゆく」を読みながら、今はどのあたりを走っているなどと考えたことで、本は面白いと思いました。

皆さんはいろいろな文字に慣れているので釈迦に説法ではありますが、ここに書いてある通り、今はいろいろな言葉が自治体の中にあります。先ほど話がありましたけど、「公共施設等総合管理計画」というものもあります。あとでお話します。

あるいは「長寿命化」という言葉もあります。建物・道路・橋などを長寿命化しましょう、などと言います。皆さん驚くかもしれませんが、日本建築学会の中で、実は建物の寿命の設定はありません。不思議でしょう。建物の寿命は人間の寿命と同じで、絶対に何年までというものはありません。正倉院のように長くもつ建物もあれば、20~30年で壊れてしまう建物もあります。あとで話しますが、耐用年数という、いつ頃まで使用した方が良いという目処はあります。何が言いたいかというと、長寿命化と言いますが、実際いつまでその施設を使い続けるかについては、市民の皆さんと一緒に考えていく必要があるということです。これは今から決められることではありません。長寿命化だけ良いということではない、ということもあとで少し話します。

岡町図書館は築後約50年ですね。よく犬や猫の年齢を人間の年齢に例えることがあります。建物の年齢は、人間の1.4倍程度で考える必要があります。人間で50歳というと、私より若くてとても元気だと思いませんか。全然違います。コンクリートは60年程経つと、すぐに使えなくなる訳ではありませんが、悪くなると言われています。人間の寿命を84歳程度として、84年を60年で割ると1.4になります。岡町図書館は今50歳なので、人間の年齢にすると70歳ぐらいです。建物は築後30年頃までは割と平気です。皆さんのマンションや家もそうですよね。30年を過ぎると

いろいろなところに支障が出ます。30年を1.4倍すると42、3歳で男性の厄年にあたります。平気平気と暴飲暴食ができるのは42、3歳までで、それを過ぎると翌日二日酔いしているというような状況になります。その際にきちんとメンテナンスするかしらないかが肝心です。平気平気と言っていると調子が悪くなるのが早くなってしまいます。残念ながら、日本にはメンテナンスの習慣がありません。これからはメンテナンスしていこう、建築の世界でも長寿命化社会を作りましょう、ということですが。

今日の題材ではないですが、同じくよく言われるのが「コンパクトシティ化を図っていきましょう」ということです。豊中市のようにまちなかの市では、それほど気を遣わないかもしれません。先週は青森県の八戸市や福島県へ行きました。八戸は、日本で初めて公共が経営する書店が設置されたところです。地方に行けば行くほど、不思議なくらい本当に人が歩いていません。県庁所在地であっても、なかなか人が歩かない時代になってきています。そうした中で、これからどのようなまちを作っていくのかを考える際に思い浮かべるイメージは、団塊世代の皆さん・私・娘たちの世代では、全く違います。

先日のニュースによると、日本の昨年の新生児数は87万人だそうです。考えられません。団塊世代の先輩たちの出生数約250万人の1/3程度です。赤ん坊のことだからまだ先のことだともうかかもしれませんが、よく考えてください、10年はあっという間に過ぎます。おぎゃあと生まれた新生児は18年後には成人になります。たった18年、20年先には、彼ら、彼女らがこの社会を動かしていく時代になります。圧倒的に少ない人数で社会を動かさなければならない時代を迎えます。遠い先のことではなく、すぐ目の前のことだと少し認識していただければと思います。

豊中市に限らず、公共施設等総合管理計画を策定したり、令和2年度中にいろいろな計画の策定を予定したりと、日本の流れが大きく変わりました。残念な話なので覚えておられるかもしれませんが、平成24年12月に笹子トンネルという中央道の高速道路で不幸にして9名の方が亡くなりました。普通に高速道路を走っていただけです。スピードを出していた訳でもなく、普通に走っていたところ、いきなり一瞬のうちに自分の命がなくなる、自分の家族の命がなくなるという事故が起きました。これが日本を大きく変えました。これで霞ヶ関はどうしたかを話します。実は予兆として、今まで作ってきたインフラがだんだんと危なくなってきた、という出来事はいくつかありました。新幹線が走っていたら急にコンクリートの破片が飛んできてガラスが割れたというニュースがときどきあります。和歌山市では、水道管の老朽化による工事で、最長3日間の大規模断水が予定されていました。あれはもう人ごとではありません。メイン管ではなかったから良かった、で本当に済むのでしょうか。メイン管も同じように作られている訳です。これからはカサブタが剥がれるようにしてこうした事態がどんどん生じるはずですが。

私たちの先輩の代が前回のオリンピックの時に新幹線を作り、東名高速道路を作り、ものすごい勢いで便利になっていったこの社会を私たちは享受してきましたが、それから50年が経ちました。建物・インフラも年をとり、人間でいう70歳ぐらいになると、やはりいろいろなところに支障が出てしまって、こうした事故が起きてしまいます。

年を取ることが悪いのではありません。これからは、それをどうメンテナンスしていくのかがカギになります。人の命を奪うことがないようにメンテナンスをしっかりといきましょう、という方向にここで日本が大きく舵を切りました。この事故を受けて、日本では霞ヶ関が「インフラ長寿命化計画」を作りました。全省庁が対象です。文科省だろうが財務省だろうが厚労省だろうが地方の公共団体だろうが、全部の公共団体に対して「インフラ長寿命化計画」に基づいて、メンテナンスサイクルを作ること求めました。どんどん建物を作っていた時代から、メンテナンスをしていく時代への転換です。建物を作ること構わないが、今存在する資産のメンテナンスもきちんとしていく、その点も付け加えなければならない、という方向へ大きく舵を切りました。

建物・インフラの老朽化が人命に影響を与え始めたということが、日本が大きく舵を切り始めた理由です。豊中市の図書館の老朽化が著しいことなどを踏まえ、次にどのような計画を立てるのが良いのか、いよいよ考えましょうという時代になってきています。豊中市に限らず、今は全国の自治体でそうした計画を作っています。図書館だけでなく、市役所も、学校も、公民館も、ホールも、ありとあらゆる公共施設をどのようにメンテナンス、改築して次に進めば良いのかを検討する時代になりました。平成 24 年以降、正式には平成 26 年に通知はきました。

今年の 4 月から令和 3 年春までの 1 年間をかけて、令和 2 年度中にこうした計画案を作りましょうという動きがあり、全国の自治体が必死で作っています。いろいろと大変です。先ほどパブリックコメントの話が出ましたが、約 1 年後にはこうした会議やパブリックコメントが全国のいろいろなところで開催されている状況になります。そういった意味では、時間軸でいうと笹子トンネル事故を受け、公共施設マネジメントが始まっているという認識を持っていただければと思います。

ここで言いたいのは、老朽化していることが悪い訳ではなく、支障があることがいけないということです。人間で例えると、私もそうですが、新幹線で長旅をしていると腰が痛くなってきます。昔は全然平気でした。年を取って、膝が痛い、腰が痛いのは老化ですので仕方ありません。支障をきたすというのはどのようなことかという、それで歩けなくなってしまうようなことです。そこまでいく前に治さなければと思います。痛くなるのが悪い訳ではなくて、動けなくなることがないようになるべく健康でいようとする、それが長寿命化社会を築き上げるということです。

いずれにしても全ての根源は何かというと、施設が古くなり、人間に被害が生じるようになったことです。今は地方自治体職員を辞めています、元々役所の中で設計ばかりしていた人間が、「公共施設マネジメント」を始めたそもそもの原因は何かというと、これ（写真）です。当然重くて持って来られないので、写真だけで申し訳ないです。実物は、高さが約 30cm、重さが約 20kg あります。母親から米 10kg をスーパーで買うよう言われたら、私なら重くて怒りますが、その倍の重さのコンクリートの破片ではなく、塊です。これが私の管理していた佐倉市の最も伝統ある中学校の屋上から落ちました。4 階建ての屋上からです。嘘ではありません。私が教育委員会に異動したばかりの年で、あの時を思い出します。今でも覚えています。教育委員会に異動して思ったのは、始業時間が 8 時半なので、その時間までは静寂だということです。学校は 34 校あり、各校の先生方から日々電話があるのですが、公務員は 8 時半から勤務するものと思われているのか、その前に電話が鳴ることはありません。その頃新人だった私は朝一番に出勤していて、その日だけは 8 時半よ

りも前に電話が鳴り、嫌な予感がしました。こんな時間に鳴るはずがないと思いながら、私が電話を取りました。すると、普段は笑ってばかりの明るい教頭先生が電話口で焦っていて、「とにかく来て」と言われました。「え、どうしました？」となり、何か起きたのだらうかと電話を置き、その学校まで急いで行きました。これ（写真）の半分がなく、残り半分の尖った方は地面に突き刺さっていました。まっ逆さまにです。掘り起こして水洗いし、自分の戒めにしようと思い、いつも私の机の傍に置いています。これはその写真を撮ったものです。

これは4階の屋上から落ちていて、落ちた先は子どもたちが通る昇降口の真横でした。夜中に落ちたので、周りの屋根や手すりは破損しましたが、幸いにして子どもに当たることはありませんでした。4階から20kgの重さのコンクリートの塊が落ちてきて、中学生の頭に当たったたら即死では済みません。身体がなくなります。その時に公務員として、正確には人として恐怖を感じました。自分の娘も中学生ぐらいだったこともあり、あたかもフラッシュバックのように、ドラマのような映像が浮かびました。血だらけの子どもを抱きかかえて「教頭先生、早く保護者呼んで」「救急車」と叫びながら、自分も血だらけで介抱している映像が浮かびました。その次に浮かんだのは、謝罪会見です。新聞記者さんがいて、白いテーブルがあって、教育長と教育次長と局長と課長が座っている映像です。「申し訳ありませんでした。」と立って謝ったところに、皆さんがばーっとフラッシュを焚き、次の日の新聞で「佐倉市で重大事故、児童死亡」「どんな管理をしていたんだ」などと書かれ、私はずっと青ざめてそれを見ている状況を想像しました。

その時に思いました。どんなに泣いて叫んで謝っても、結局事故が起きたら終わりだと。どんなに良いサービスをして、事故が起きてしまっただけではいけないと思いました。特に学校などは、子どもは行きたくて行っている訳ではないかもしれませんが。この学校に行けといわれて行っている訳です。そういう意味で、その学校で事故は絶対に起きてはいけないと思いました。公共施設であればあるほど、やはりそこは皆さんが使う施設なので、立派で華美なデザインではなく、とにかく安全な施設であることを優先しようと、その時に決意しました。結局のところ、公共施設に最後に求められるのは、台風などの災害があったとしても安全な施設であるということ、それだけです。唯一これを守れなければ仕方がない、とこの時に痛切に思いました。

皆さん、今日は公務員の実態を教えましょうか。豊中市ではなく、私がいた自治体の実態です。職員は1,000名ほどいました。1,000名のうち、私のような一級建築士はざっと10名程です。1,000名中10名の、係長でもない人間たちが何を言おうが、状況は変わりません。こういうことではいけないとどんなに声を上げて、もっと改修費を付けるべきと言ってもなかなか付きませんし、予算が付く方には付きます。それは、いろいろな案件がたくさんあるためです。一級建築士といっても、役所の中での技術屋の地位はあまり高く見られていません。あまり文章も書けないし、本も読めない、そういった雰囲気があります。豊中市ではなく、私がいた自治体の場合です。財政課という査定をして予算を付ける部署があります。その頃私は、財務諸表に基づきこのようにお金を付ければ良いのではないか、あるいはこのように予算を取れば良いのではないかと、建築技師の立場として財政担当職員にきちんと伝えられるようになりたいと思っていました。建築バカ、建物バカではなくて、予算などのお金をどのように取ってくるのかもきちんと考えられるような建築士になりたいと思いました。

理想的な学校や美術館など、設計しようと思えばいろいろとできるかもしれませんが、結局のところ自分の手を縛るのは、それをどれだけのお金と期間でやり遂げるかということです。ここが今日の大きなポイントです。若い夫婦が一戸建ての住宅を建てるとします。お母さんはセンターキッチンの5畳ぐらいあるキッチンルームがほしい、ストックルームは2帖ぐらいほしいと言います。お父さんはお父さんで、六畳一間の書斎がほしいなどと言います。子どものためには、朝食の部屋・昼食の部屋・夕食の部屋と、それぞれ1部屋ほしい、いろいろな部屋がほしいと言うかもしれません。お客さんが来た時のために、和室が20畳ぐらいあった方が良いと言うかもしれません。昔はあったかもしれませんが、今は要らないですよ。そこで「いくらで作りますか」「1,500万しかない」となると、「ちょっとお客さん、それは無理ですね」という流れになりますね。設計士としては5,000万用意してくれたらできます。汚い話ではなくて、お金の話もきちんとしていかないと、これからはなかなか上手くいかない時代になってきたということです。

今日の話のポイントです。(資料P.4 下段) 解決しなければならないのは質や量、品質、財務、機能など書いていますが、表現は何でも構いません。これらについて話していこうと思います。ここは少し気にしてもらいたいのですが、公共施設や民間施設も含めて何が問題かという、この2つに特化できるのです。1つはとにかく老朽化しているということ、もう1つはたくさん持っているということです。日本の能力からすれば、どちらかだけが生じるのであれば、それほど騒ぐ必要はありません。打つ手はあります。これだけ技術が発達して、スタッフがいて、両方が同時に生じなければ、1つ1つを冷静に解決できます。今一番問題なのは、大量に持っているもの全てが老朽化していることです。先ほど言ったとおり、昭和30年代以降に一気に作ったので、逆に一気に全て悪くなりました。これが今非常に課題になっていることだけは、頭に入れておいてください。徐々に作っていけば良かったのですが、そのような時代ではなかったのです。

結局のところ何かというと、老朽化している施設が多いことから、事後保全ではなく予防保全をしましよと言われるようになってきたということです。早め早めに直しましよと。言葉はきれいですが、簡単にはいきません。例えば、自宅で朝寒くないように給湯器を点けます。外にある給湯器のボイラーが、急に点かなくなったらどうしますか。最近少し点きが悪いなど思っている、全然点かない訳ではないと、ごまかしごまかし使うことがありますね。ボイラーをしっかり直すとなると25万円かかります。2、3万円では直りません。私も建築士なので知っていますが、自宅のことで急に25万円と言われると、さすがに「大変だね」と思います。いずれにしても、一度にお金がかかるのをなるべく止めるために、予防保全をしましよということ。実際には壊れてもいない給湯器を今直しますかと言われても直さないのではないのでしょうか。ここが難しいところです、頭では分かっていますよね。一度に直すのは難しいから早めに直しておこうと思うけれど、壊れてないエアコンを15万円かけて今年直すかと言われると、「いやちょっと待とうよ」となりますね。予防保全をするということはそれをきちんとしていこうということなので、現実的にお金を調達するのは、なかなか難しい社会です。

何が1番問題かということ、老朽化していること、安全ではないことです。デザインをこうしましよ、天井の色をこうしましよ、そういったことではありません。建物にまつわる諸々のことを極限まで削ぎ落して何を守るかということ、安全を守るべきだということです。人の命を守ることで

す。では、どのようにたくさん持っていることを解決するか、実はなかなか答えがありません。学校だと、Aという学校とBという学校の両方は持てないため、容赦のない言葉で言うと統廃合をして1つの学校にまとめ、もう一方の学校は廃校にします。廃校という言葉はネガティブで、捨てていくみたいで嫌いですが、1つの学校にしましょうという方法もあります。今は全国でそのように公共施設をなるべく減らそうという話がありますが、実はそれだけではありません。昔の家にはよく客間がありましたね。親戚一同が集まるとたくさん来客がありますから、台を囲んで20畳ぐらいある部屋がありました。今はそもそもそれほど集まってきました。20畳の和室が必要だった時代から、今は六畳一間でも良いという感じです。ダウンサイジング、サイズ感を落としましょうという時代です。昔のように大きな建物ではなくて、小さな建物でも良いという時代になってきています。

ここが皆さんに理解いただきたい肝心なことです。明治維新以降、こうして施設を作り続けてきた日本が、この2~3年でこの程度の量にして根本的に見直していきましょと動いていくのはなかなか難しいです。これから何十年かかけて、進めていく時代になるのです。1~2年どころではない、その認識は持ってください。何十年もかけて取り組みますが、すべてを一度にはできないため、順番でいろいろなところを直しはじめます。複合化なども順番に進めていく時代になります。たまたま順番が最初にくるか、後の方にくるか、その施設の年齢差などによっていろいろあります。とはいえ、その何十年かの間で事故は絶対に起きないようにしていきましょという話です。

これは難しい言葉ですが、知っておいていただきたいと思います。建物には寿命がないと言いましたが、建物・インフラには耐用年数という考え方があります。日本では法定耐用年数が決まっています。少し堅苦しいですが、どちらかというと会計法・財政法に基づく減価償却の考え方です。例えば、こうした鉄筋コンクリートの事務所建築だと50年って決められていますよね。資産の価値が1年に50分の1ずつなくなっていって、一応50年で価値がなくなる、そうした計算をするためのものです。だからといって50年と1日目ではたんと壊れる訳ではありません。日本の建築技術は高いのでいきなり崩壊することはありませんが、会計上は一応そこで減価償却が済み、資産価値がなくなることになります。これが基本的な耐用年数です。実は、耐用年数はこの他に3つあります。

1番最初の物理的耐用年数は建物の強度です。阪神大震災に耐えられるかどうかの強度などです。物理的なものの寿命の尽きる時は、必ずどこかでやってきます。一応学会的に言うと、寿命ではなく耐用年数というのは、鉄筋コンクリートだとだいたい60年、65年が限界だろうと言われてます。きちんとメンテナンスをしておかない場合です。しかし、そこまでいく前に直さなければいけません。

2番目には財務的な経済的耐用年数があります。これは建物を維持管理するお金がなくなる時のことです。先ほど言ったようにタダでは済みません。こうして使っている電気も、必ずあとで電気代を払う訳です。ガスにしても公共施設だからといって大阪ガスがタダで提供してくれる訳ではありません。全てにおいてメンテナンス費用がかかってきます。お金が耐えられなくなる時が、この経済的耐用年数が尽きる時です。

もう1つは、機能的耐用年数です。これは1番複雑です。例えばこの建物が設置管理条例に基づいて建てられた時代とは、すでに社会風土が違っています。私がこの建物に入った瞬間に実感したのは、玄関前などがやはり狭いということです。おそらくエレベーターのない時代に建てられ、後でエレベーターを付けたためかと思います。車椅子や松葉杖を使われている方が何人かで来られた時には狭く感じるでしょう。災害が起きて人が玄関に殺到した際に誰かが倒れたらどのように逃げようかとなる訳です。今はユニバーサルデザインと言いますが、昔はそういう機能や発想はありませんでした。段差が当たり前だった社会から、ユニバーサルデザインが当たり前になってきています。障害者に対応できる施設かを考えると、もう少し広さが必要ということになります。

それから、エレベーターに乗ったところとてもゆっくりでした。私は今まで数百数千のエレベーターに乗ってきたと思いますが、多分1番遅いと思います。止まっているのかと不安で、大丈夫かと思うほど遅かったです。予兆があり、4階から降りてくるのも遅く感じました。とても時間がかかると思っていたら、乗ってみて分かりました。上がるのがとても遅かったです。エレベーターの機能もどんどん進歩していて、今は人が倒れた時のストレッチャーまで運べるようになっている時代です。車椅子だけではないのです。ベッドを運んでこられるような、救急車で運ぶことのできるような時代になってきていることを考えると、そうした機能の面で寿命をきたす、耐えきれなくなるということが生じます。

これらの3つの耐用年数があるので、この建物をどうするか、あの学校をどうするかを考える際には、この3つをバランス良く考えていかないといけません。どれか1つだけではないということを知識として持っておいてください。

物理的耐用年数というのは、基本的に人間と同じです。生まれた時が1番元気です。最後に亡くなるまでの間、いろんなメンテナンスや修繕をしないとダメです。そうした時間軸の中でいろいろな運動能力が下がっていくので、病院で治して、また治しということになります。こうした時間軸が建物にもあります。

経済的耐用年数についてです。私も人のことは言えませんし、公共においても、市民の皆さんも一緒だと思います。この図書館を作るのには何億円、この学校を作るのには何億円という議論をたくさんします。ところが、最初にかかるお金はこの建物を持つことにかかるお金のうち、事務所建築ではわずか14~15%です。例えばこの建物を14億円で建てたとしても、その後にかかる電気代、ガス代、エレベーターのメンテナンス費用など全部入れると、トータルで90億円程度かかるということです。

例えば、マンションを買った場合にマンションの修繕積立金を払うのと同じです。月々6万8千円でマンションを買えると言われても、実際はプラス2万円の修繕積立金も払わないと住めないのと同じです。建物を建てる時のお金も問題ですが、生涯かかるお金も実は4倍5倍かかります。そのため、本当に議論しなければならないのは、建物をどのサイズで作っておくかということです。今は足りるから大丈夫でも、孫の時代にこれが払えなくなれば破産するということです。私が娘のために「家を建てておいてあげる、その代わり3,000万の借金を残すね」と言ったら、娘は怒ると

思います。「頭金があるから作っておくよ」だけでは、濟まない時代になったということです。知ってほしいのは、最初にかかるお金は、全体でいうと 1/4、1/5 程度だということです。その認識を持っておいていただければと思います。

最後に少し難しい機能的耐用年数の話です。これは実際に私が設計をした事例です。学校体育館を設計しました。これまでの学校体育館と比べて、舞台が低くなっています。これからの学校体育館を作るのであればと思い、このようにしました。例えば敬老会を開催する場合には車椅子の方も上がって行けるようにしたいし、障害を持つ生徒でも卒業証書を取りに行けるようにしたいと思いました。舞台の高さが 1m あるとスロープが長くてなかなか上がれないので、横に常設のスロープを最初から設置しました。こうしたデザインとすることで、高齢者・障害者の方でも使えるようにしたい、学校自体がなくなって体育館を地元に開放する際にも生涯学習活動に使える体育館として残したいと思いました。学校機能だけで考えるか、地域でも使える防災拠点として考えるかということです。これからは、こうしたことを考えていきましょう。「どうせ作るなら、大きなもの」ではなくて、「どうせ作るなら、柔軟に使えるもの」を作るのです。そうでないと、次の時代には使えなくなるかもしれないからです。

佐倉市には学校が 34 校あって、その全部にプールがあります。最終的に 2 校で古くなり過ぎて、学校プールを取り壊しました。その学校の水泳授業では、民間スイミングスクールと連携して水泳指導をすることにしました。もともと学校プールを廃止したかった訳ではありません。なぜこのようなことが起きたかということ、きっかけは 3.11 です。関東が阪神淡路大震災を経験していないように、関西の方たちには 3.11 の影響があまりなかったかもしれません。私はあの時、佐倉市役所の屋上にいました。今は禁煙しましたが、あの頃は煙草を吸っていて、その休憩中に大きく揺れ出しました。これは建物が壊れるだろうと思うぐらい、本当におもちゃみたいに揺れました。これで私の人生は終わりだと思っていたら、建物は耐えられて、一応生き永らえることができました。ちなみに佐倉市の市役所は、黒川紀章さんの設計で建てられていて、使い勝手はあんまり良くありませんが、ありがたいことに強度はありました。

3.11 の時に何が起きたかということ、電気が止まりました。通常の停電だけではなくて、夏場の電気をたくさん使う時期には計画停電がありました。地域全域の電気を一括で止められます。公共施設であろうが、図書館であろうが関係ありません。このブロック全部を何時から何時まで止めるからと、東京電力から強制的に止められます。あの時は必死に生きていかなければならなかったので、耐えました。その時取り組んだのは節電です。佐倉市役所は今でも照明器具の 1/3 ぐらいを抜いています。あの当時は照明器具自体を全部抜いていました。スイッチを押しても点かない状態です。要するに最低限の照明に絞って過ごしていました。

その時に学校で節電するにあたり何が問題だったかということ、学校のプールでした。学校のプールということ、水だけではないかと思えますよね。水だけではないのです。よく考えてみると、水がいつもきれいな状態のままということは、とても大きな循環型ポンプ機が動いているということです。私も知りませんでした。この電気量がものすごく多いのです。夏の電熱レベルと電気代があまりに高いため、なぜかと思ってよくよく調べてみたらこれでした。この 1 機だけで学校全体の

14%です。あれほど広い学校の照明を全部点けて、エアコンを全部点けていても、この1機だけで14%も使っていることになります。当時は国が15%節電しようという方針だったため、学校にプールさえなければ乗り切れました。そこまでは分かりましたが、急に学校でプール廃止はできません。そのため、3.11の年だけは、プール開きはささっと終わらせました。各学校の先生たちに、そうした指導通知も出しました。

しかし、結局のところ、それは持続可能な対応ではないので、改めてどうしようかと考えました。冷静に、最初から順番に考えよう。お金がどうなるのか、経済的耐用年数を迎えるのかどうかなどを考えました。当時の佐倉市の学校に今まで通りの修繕を施していくと仮定して計算すると、30年間で30億円程度がかかります。プールだけで、年間1億円程の維持管理費がかかります。それに対して、民間スイミングスクールに子どもたちを送り届け、そのプロたちに水泳指導をしてもらい、先生たちは付きっきりで監視をすることを考えました。先生方は安全管理だけに徹底して技能などはプロに教えてもらい、子どもたちをバスに乗せて帰ってくることで、スクールを借りるお金、指導してもらうお金、バスで移動するお金、全部を足し合わせたお金とどちらが得か計算すると、佐倉市はたまたま駅前にスイミングスクールがあったため、結果としてはスイミングスクールに預けた方が安くなりました。税金を余分に取りたくなく子どもたちをスイミングスクールに通わせることは可能だということになりました。これは財務面上の話です。今のお金を持ってすれば、払えなくはないという確認は取れました。

品質も民間だから大丈夫だろうと考えました。ただ、機能に問題がありました。教育委員会の時に私もよく言われました、「教育はお金じゃない」と。確かにそうかもしれませんが、先生たちがしたい授業をするにはお金がかかります。お金をどうこうするために取り組んでいる訳ではありませんので。そこで、スイミングスクールにアウトソースした時にどういったメリット・デメリットがあるのか、教育の視点から考えようということになりました。屋根付きなので、天候に左右されることがありません。水質も一定の管理ができます。プロに指導してもらえます。天候が悪くて、寒くて震えながら泳ぐこともありません。学校だとお湯のシャワーもありません。

こうした比較検討をして、地元へも説明会をさせてもらいながら、保護者の皆さんからもきちんと意向を聞いて、75%の保護者の皆さんが、「良いじゃない」「民間スイミングスクールで授業しよう」と思ってくださいました。その代わり、プールをなくした場所をどうしたかという、グラウンドに変えました。手狭な学校だったため、低学年から高学年までの生徒がグラウンドでごちゃごちゃと運動をしていて、高学年の子が投げたボールが低学年の子に当たりそうで危ないという状況でした。プールは敷地を大規模に使っていたため、それがなくなると低学年用のグラウンドが作れることになりました。実はそういうメリットもありました。そういう意味では、同じ学校という施設の機能をどう活かすかも考えました。

よく言われました。「学校は夏休みの風景なんだよ。子どもたちの歓声が沸いて、水しぶきが飛び交い、子どもたちが喜んでいる、それが夏休みなんだよ。スイミングスクールに預けるとなると、それがなくなって寂しいじゃないか」と。分からなくもないです。しかし、そうした風景を保護者のお父さんが観に行けば、今は変質者扱いです。それが現実です。今の世の中にはプライバシーの

保護などいろいろなことがあって、PTA 会長だった私でも、娘のプール指導のためでも、うかつに覗きに行くことなどできません。フェンスでしっかりと囲まれています。そういう意味では、昔のプール機能と今のプール機能では、周りの環境が大きく変わり、どのような指導をしていくかを考える時には、教職員だけが教えなければならない時代ではなくなったのではないかと、ということです。

余談の余談で言うと、私の妻は小学校の先生です。カナヅチですが、指導はしていました。交際していた頃には、溺れそうになったこともあります。泳いでいる時にプールの中にいきなり沈んで、目の前からいなくなりました。私が必死で上げて、しがみついてきたので、こちらが死にそうになりました。何が言いたいかというと、妻を悪く言っている訳ではなくて。勉強を教えることは得意かもしれませんが、体育やクロールを教えることは別だということです。先生がしなければならない仕事は、本来子どもの安全管理をすることです。クロールや息継ぎの仕方は、それを教えられる先生が教えれば良いのではないのでしょうか。

次に、これは青森県庁です。建物が古くなり建て替える時に上の方を切りました。県庁の建物を改修するのに総取り替えするのも良いですが、なかなかそこまでのお金はありません。どうしたかという、まずは人間でいうシェイプアップをしました。自分の骨がもたないからダイエットです。まずは6階より上の建物を壊しました。身軽にしてから骨組みを強くする方法を取り、なるべく安いお金で改修した事例です。今はこうしたこともできる時代だと知っていただきたいです。

次は大阪の門真市です。庁舎を建て替えるお金がなかなか工面できないということで、廃校になった中学校を改修して市役所に替えている事例です。門真市は、松下幸之助さんの記念館があるところです。この事例で驚いたのが、議場が元は給食調理場だったということです。それを成し遂げたのがすごいと思いました。さらに門真市さんがすごいのは、これは仮庁舎だということです。建て替えることをやめた訳ではないのです。夢はきちんと持ち続けているけれども、今すぐ建て替えなければならないかといわれたらお金を貯めなければならないから、貯まるまでの間は暫定的な庁舎で過ごすことを選んでいるということです。機能はしっかりしていて、耐震補強もして、身の安全はしっかり確保しています。機能が確保できていれば、見た目は別にどうかということではないとしています。

私がここで1つ言いたいのは、時間軸の上できちんと解決しているということです。こういう建物がほしい、と皆さん思いますね。私は今回、これが最高の解決策の1つと思っています。終着点にすぐ行くのか、まずは第1段階の整備をして20~30年過ぎた後に最終的に50年後の姿に持って行くかです。これからは、このように段階的に時間軸の中で解決していかないとはいけません。これが理想だからといって、いきなりそこまで持っていくだけの時間・体力・お金がないから諦めるか、無理矢理進めるか、あるいはその中間の段階で1回暫定的に仮設といった落としどころを見つけるかです。そういった落としどころをしっかりと見付けていく、時間軸の上で解決していくということが大切な時代になったと思います。

次にこれは岡山県新見市の哲西町というところです。調整区域で山間部なので、支所を作る時に

そこに保育園関係・生涯学習センター・図書館なども一緒に入りました。面白いのは、心療内科・歯医者も入ってもらったところです。実は今、私は別途関東で複合施設の検討委員をしていますが、今は医療モールが流行しています。公共施設の一部に医療機関にも入ってもらい、一緒に開業してもらおうという形態です。そうした機能を併設していく自治体が増えています。そこは公共が用意するのではなくて、民間さんに用意してもらいます。同じ敷地内にあった方が便利なので併設しています。1つに集約していく方法も公共による取組みだけではありません。

次にこれはオランダの議場ですが、日本と違ってほとんどフラットです。日本のように迫り上げの席ではないです。イギリスなどを見てもそうですね。向こうでは、議会がそんなに仰々しく作られません。設備環境は整っています。これまで日本が作り上げてきた議会の発想とは違う方法も海外では昔から取り組まれていますし、これは良いとか悪いとかではありません。いずれにしてもこれであればバリアフリーです。私なら、もし災害が起きたらここをすぐに防災センターに転用します。災害が起きた時に議会などを開催している時間はないためです。ここにフルスペックの設備が入っているのであれば暫定的な防災中央センターに変え、執行部隊が集まり、豊中市の災害状況をモニターで確認して指示を出すようなコントロールルームにすれば良いと思います。落ち着いた段階でまた議会を再開すれば良いのです。そのようにしてどんどん使い回しができる社会になっていけば面白いと思います。

地方自治がどのように作られているのか、少し確認しておきます。国とは違って、地方自治では市民の皆さんが、議会の構成員を選挙で選ぶ権利を持っています。もう1つ、行政のトップを選挙で選ぶ権限も持っています。国では違って、国民が総理大臣を直接選ぶことはできません。大統領制ではないためです。国と地方では、大きく仕組みが違ってきます。地方自治は、市民がこの両方をしっかり見ていて、選挙で選ぶ権利を持っています。行政というのは両方から責められている感じですが、いずれにしても市民にとって何が良いかという、この行政・議会・市民の3つの関係で、公共施設の管理なども進めていくという発想をきちんと持っていくことです。なおかつ、大阪であれば府もありますし、例えば隣の市の施設を使うこともあるでしょう。昔の藩ではないのですから、豊中なら豊中だけで、そこから出てはいけないということはありません。手形が要することもありません。そういう意味で行政は1つではないということです。いろいろな図書館を使うこともあるでしょう。そういう意味では、これからは行政どうしが連携し合い、サービスを提供する時代でもあります。行政だけではなくて、3者間で連携していく時代でもあります。大きなネットワークを築きましょうということです。公共の連携でいうと、地元の高知では、皆さんも知っているようにオーテピア高知図書館という高知県立図書館と高知市立図書館が一体となった施設があります。通常はどこへ行っても県庁と県庁所在地は仲が悪いものです。ご多分にもれず高知もそうでしたが、今回は手を結び、県立図書館・市立図書館をやめて、1つの建物に入りました。合築と呼びますが、どこが良いかどうかは別として、あれは結構大変なことです。このように公共どうしの連携もあります。

アメリカなどでいうと、こうした社会でもありました。私はポートランドへ行ったことがあります。ポートランド大学で学んだ際に思ったのは、アメリカには市町村と同じぐらい特別行政区があるということでした。日本でいうと、豊中市の中に豊中市教育委員会があって、豊中市の学校が全

部豊中市の中で割り振られているという時代ではないです。要は隣の市と連携している事例もあるということです。

トータルで申し上げますと、先ほど私は自分の話をしましたが、これからはあえて余地を残す時代かと思えます。施設に対しても余裕を持つことです。将来の姿までしっかりと全部示し切るのか、概ねのものを作っておいて、20年後なら20年後の豊中市民・豊中市議会・豊中市職員がもう1度話し合っ、その際に作り直す余地を残しておくのかということです。私たちは大人なので、余地を残しておきましょう。昔の先輩たちの作り方とは少し違うのかもしれませんが、そうした作り方をしておかないと、3つの耐用年数のどれかがダメになった時に、二進も三進もいきません、もう後戻りできません、となります。私たちの子どもたち孫たちの世代から「お父さんお母さん、何していたの？」と言われないようにしなければならないと思います。

どう作るかという答えは、これから皆さんの中でいろいろ考えていかないといけない時代ですし、大変だと思います。車でいうとアイドリングといいますか、少し遊びを持って、遊びできちんとハンドリングできるぐらいにしなければなりません。袋小路に入ってバックもできないとならないためにはどうすれば良いか、そういった運転を豊中市さんとしていく時代なのかと思えます。今日はほんの1時間程の話でしたが、今の世の中の流れのようなものを少しご理解いただければと思います。ご清聴いただきまして、ありがとうございました。

〈3. 講義 終了〉

4. 質疑

○司会 それでは、これより質疑応答の時間に移ります。皆様から事前に書いていただいた質問用紙を受付でお預かりしております。拝見させていただきましたところ、ほとんど全てがこれからの豊中市の中央図書館候補地などに関わる質問でしたので、のちほど豊中市の職員から答えさせていただきます。

まずは、池澤様からの今のお話を聞かれて、もっと詳しく聞きたい、もっとこういうことについて知りたいという点などがおありでしたら、池澤様にお答えいただこうと思います。素朴な疑問などでも結構です。いろいろな具体的なお話も出てきましたので、事例についてのご質問もありましたら、いかがでしょうか。

○読書振興課 先生のご著書のプールの件は、いくつもある事例のうちでも特徴的な事例の1つとして読ませていただきました。その合意形成について聞かせてください。市民の方にも納得していただいて、最後にアンケートを取って大方の方に賛成されるところまで、どのぐらいの時間をかけて説明されたのか、教えていただけますか。

○池澤先生 何年もかけていません。多分半年から1年程度です。役所的に言うと、佐倉市の中で民間のスイミングスクールにアウトソースしましょう、などという話はみじんたりともなく、発想も全くありませんでした。3.11の時に先ほど説明した経緯がありました。

余談ついでに、私が教育委員会に行く時になぜそこまで信念を持っていたかを話します。学校の施設は古くなっています。学校のプールで排水溝に手をかけて、バタ足などをしますよね。それで子どもたちが、血だらけになります。なぜかと思いました。教育委員会が飛んで行き、どうしたのかを聞いてみると、プールはFRPというボディでできていて、長年塩素などに浸かっていると表面が溶けてくるのだということです。FRPは細かいガラス繊維でできているので、私みたいな分厚い皮の手の場合はそうでもないですが、子どもたちの手は柔らかいので、少し触っただけで刺さる訳です。

こうした経験をした際、市の中ではいろいろと議論がありました。老朽化やこれらの事故を止めずして、公共施設とは何たるやと、教育委員会の中で教育委員長とも話をしました。しかし、財源もなく、プールの改修はままなりません。余談で言うと、佐倉市の34校は全部自校給食です。頑として自校給食にプライドを持っているので、センター方式を持ちません。34校に栄養士をはりつけていて、34校にファミレスを持っているようなものです。この維持管理にはとてもお金がかかります。これらを考えると、34校の校舎の改修などには手が回りません。

公務員の間では皆分かっていた。このまま維持管理はできないと分かっている、よそゆきの言葉だけでごまかしていました。これでは子どもたちが本当に事故に遭う、どうするのかと思っていたところに3.11が起きました。皆が認識できたのは、教育委員会の中で先生たちに集まってもらい、ワークショップ形式で職員たちと話し合った時からです。どういった教育が子どもたちにとって本当に良いのか、市長を交えてしっかりと詰めました。時間的にはそれほどかかっていません。早く合意形成できたのは、流れに乗ったからだと思います。あの時は民間スイミングスクールに通うということは、全国的にも発想としてあまりありませんでした。新聞などもたくさん来ました。最初は良い評判ばかりでもありませんでしたし、それはそれで試行錯誤しながら進めていきました。

○質問者2 先生にお聞きするよりは、事務局に聞いた方が良いかもしれないのですが質問します。図書館の建物を作ったあとのメンテナンス費用がたくさんかかるというお話がございましたけれども、図書館だと蔵書を更新しないといけないと思います。それからもう1つ、どの程度進んでいるのかよく分かりませんが、北摂地域の広域連携で蔵書を交換するなどいろいろな取組みがあったかと思います。それらと図書館を運営することに係る人件費や光熱費といったコストはきちんと把握できているのでしょうか。

○読書振興課 図書館のランニングコストの考え方でよろしいでしょうか。図書館で閲覧していただけますが、豊中市の「図書館活動」という冊子がございます。こちらに毎年どういった予算が必要なのか、ランニングコストにあたる資料費・光熱費、人件費など、昨年度から数年間分の経緯も含めて明示しております。豊中の図書館は今9館ございまして、それをまとめた数を表しておりますので、もしよろしければお帰りに見ていただけたらと思います。

○**読書振興課** 広域連携につきましては、北摂7市で提携しております、限定的な利用ですが、お互いの市で貸し借りをできるようにしております。それにかかる費用は、カードを作るお金や、PRする際のチラシ代などになるかと思えます。

○**質問者2** 上手くコントロールすれば、蔵書を整備するコストの削減にもなるのではないかと思います。

○**読書振興課** そうですね。各市で持っていない本をそれぞれの市との間で貸し借りできるようにするため、相互貸借というシステムも使っております。それは北摂に限りません。大阪府全体でお金をかけずに、府の車も利用して貸し借りをしています。

○**質問2** 私が言いたいのは、そうした協議をきちんとされているのかどうかです。

○**読書振興課** 北摂地区の中で職員連絡会というものがあります。毎年テーマに沿って、どのようにしたら良いのかということなどを情報共有しています。選書のことや、例えば今年は移動図書館についても情報を共有しました。先ほど言っていたような資料に関してもテーマにのぼったことはあります。

○**池澤先生** 口を挟んで申し訳ありません。図書館に限らず、これからは圧倒的にお金もなくなり、人がいなくなるという時代で、働き方改革についても提唱されています。例えば街路樹の整備など、なぜ突然途切れるのでしょうか。公園の整備であっても、これからは市ごとに取り組む必要のないものもある訳です。もっと広域に取り組んだ方が良いものがあります。私のイメージでは、都道府県レベルでの広域連携よりも、市町村間の広域連携を行政サービスごとに進めていく時代になるかと思えます。今は前段階だとしても、国に広域連携を進めていこうという機運があるのは事実だと思います。図書館サービスという分野だけではなく、例えば学校の施設管理も正にそのような状況になってきています。公園、道路、下水道などの整備を各市で進めるのかということです。協議を重ねていって、何から始めるかが肝心なところです。1つの作戦としては、アメリカでいうところの特別行政区、日本の地方自治法でいう事務組合という、そういったものをきちんと作るということがあります。図書館〇〇組合、例えば北摂図書館管理組合という組織を広域で作って、豊中市とは離れたところで広域市町村の役目を担うというのも作戦としてあるとは思えます。

○**読書振興課** 北摂7市3町の中では、豊中にお住いの方は例えば池田市、箕面市、吹田市などの図書館もご利用いただける状態です。この仕組みがなくても豊中市で持っていない本は他市町村からの取り寄せが可能というかたちにはしております。これは大阪府下に限らず、最終的にどこにもなければ館内閲覧にはなりますが国立国会図書館から取り寄せて提供します。どうしてもこの近隣の大阪府下が中心の連携にはなりますが。

今度吹田市さんが中核市になられるとのことで、西宮・尼崎・豊中・吹田、それらの頭文字をとってNATSと言いますが、その市長が集まるフォーラムが先日ありました。今までは大阪府と兵庫県ということで、図書館どうしの横のつながりは7市3町ほどありませんでしたが、これからは県

を越えて少し何か一緒にできないか、市民サービスの向上やコスト削減につながるのではないか、というところも含めて考えていく方向にはなっています。

○司会 では事前にいただきました質問用紙について、ご紹介させていただきます。まず1つ目です。

質問用紙1 中央図書館機能を持つことで、現在とどのように変わるのですか。

○読書振興課 「このようになります」というのは、職員の中や皆さんの頭の中で、いろいろかと思えます。昨年度の協議会でいただいた意見書の機能などを基に検討していきます。今できていなくて中央図書館で必要なこと、今できていることで中央図書館にも持って行きたいこと、そのあたりを昨年度まで2年間かけて整理していただきました。どのように変わるかに関しては、私たちが今まで協議会でも示してきたように、さらに専門性の高い図書館司書や資料を通じたサービスを行っていくということがあります。常々頑張っているものの今はできていないこと、例えば豊中の図書館のPRについて、広報部門を設けることでより上手くPRしていくことなどもあります。さらには、分散している参考図書などを、ワンストップで提供することもあります。

中央図書館に何を盛り込むのかも含めて、私たちはイメージを持っていますが、まだ土地も決まっておられませんし、いつ建つかも決まっておられません。中央図書館へ全部は持って行けませんので、いろんなプログラム、施設設備の中から持ち込みたいものについて、皆さんとキャッチボールをしながら考えていきたいと思えます。皆さんのご要望は、お手元のアンケート結果に出ています。

実際に図書館を活用していただいている方の割合は登録率と言われますが、4割もありません。実際に週1回、2週に1回の頻度で来られている方の割合はさらに減って、1割ぐらいだと思います。来られていない残りの6割の方に来ていただくためにはどうしたら良いのかも含めて、皆さんと一緒に検討していきたいと思っています。

先程の先生の話にもありましたように、今考えていても2年後には状況が変わっているかもしれません。今は若い人も含めてスマホをお持ちの方は、小さい調べ物などは全部ご自身でできます。それに対して、スマホにはない情報提供とはどのようなかたちなのかを考える必要があります。年々変化のスピードが増していますので、そのあたりも含めて時代の流れ、メディアの変遷に追いつきながら、どのようなものを持って行くのか検討していきたいと思えます。そのように中央図書館の機能を考えております。

○司会 次の質問は、おそらくこちらからお送りしたご案内をよく読んでいただいたうえでの質問です。「豊中市立図書館の多くは老朽化が進んでいるほか、バリアフリーをはじめとする今日的なニーズに対応できていない状況にあります」と紹介させていただいたことに対しての質問です。

質問用紙2 「今日的なニーズに対して対応できていない状況」とは、具体的にどのような状況でしょうか？

○**読書振興課** 今日のニーズとといいますか、明日的ニーズとといいますか、先ほどの回答とも関わります。実際に先生が今日岡町図書館に来られた時に、エレベーターが後付けされたのでしょとおっしゃっていました。普通の今の公共施設、あるいは他の市の図書館に行かれた皆さんはお気付きかもしれませんが、もう少しエントランスがゆったりしていて、人の姿が見えたり、座るスペースがあったりするかと思います。それらは、皆さんがテレビでご覧になったり、他の地域に行かれた時に体験されたりする今日的な図書館のイメージだと思います。岡町図書館にはそれがありません。

この施設を改装した平成4年当時はスマホもなかった頃で、その時の館長の言葉を思い出してみますと、「なるべくたくさん資料を開架の棚に出して、市民に見ていただく。なるべくそういう書架スペースを取りたい」と言っていました。ここの2階、この会場のもう1階下ですけれども、コの字型の書架がずっと続いていて、資料がたくさんあるレイアウトになっています。その頃には滞在型というイメージはありませんでしたし、ゆったり座って本を読むというイメージもありませんでした。特に豊中市に関しては、元々貸出冊数も多くございましたし、そういったスペースを取る余裕がありませんでした。土地が小さかったということももちろんあります。

今回の市民アンケートなどでは、本をここで読みたいという意見が見られました。家でも本を借りて読めますが、図書館でできることとして、図書館で本に出会いたい、人に出会いたいということです。資料・情報提供の場であるとともに、人と出会うことも情報の1つであると思います。中央図書館であることも踏まえますと、専門的なレファレンスサービスを受けながら、いろいろな体験ができる場であることが、今日的ニーズへの対応というものなのではないかと思います。

この中の皆様も「ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス」をご覧になった方がいらっしゃると思います。豊中市では図書館以外にも、いろいろな貧困対策、就労支援など、市として割と先進的な取り組みを行っていますが、それをニューヨークでは図書館で一括して行っている、というふうに見受けられました。

例えば、図書館の大事な機能の一部だと思いますが、デジタルデバイドの解消というものがあります。今Wi-Fi、スマホなどをお持ちの方はいろいろな情報が見られますが、それがいない方はどうしたら良いのかということです。Wi-Fi機器を図書館で一挙に貸し出ししている状況が、「ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス」という映画の中でもございました。これからその今日的なニーズというものを、私たちはつかまえようとしています、それもどんどん変わっていきます。それを逃さないようにしながらニーズに対応していきたいと思います。中央図書館の中身を皆さんとキャッチボールしながら考えていきたいと思います。という意味合いで、この「今日的ニーズ」という言葉を使わせていただきました。

○**司会** 次も同じ方からの質問なのですが、これも勉強会の案内の中で、「中央図書館を核とした施設配置や分館も含めた、図書館全体の再編に向けた指針となる図書館構想」と書いたことについてです。

質問用紙 2 今 4 つの地域館・分館などがありますが、それが再編に向かっていくというのは、どういった意味合いでしょうか。

○**読書振興課** 豊中市の図書館、中央図書館が実際にどこに建つのかは、まだ決まっていない状況です。ただ、その建つ場所によっては、例えば近隣に分館があったり、サービスポイントがあったりするかもしれません。その分館を吸収したり、あるいは規模を小さくしてサービスポイント化したりする可能性があります。今、豊中の図書館は 4 つの地域館と分館を合わせて 9 館、図書室 2 室、動く図書館というかたちで、36k m²の市域をカバーしています。だいたい徒歩・自転車・交通公共機関で行けるかたちにはなっていると思います。今後、より大きな規模の施設が 1 つどこかに建つということで、それに合わせて近隣の施設のかたちや施設自体を見直していくことを、再編と称しています。

建物の大きさだけではなくて、地域の状況でありますとか、そういったことも含めて、これから考えていくかたちになるかと思えます。実際にどこに建て替えるか、まだ全然決まっていない状態なので、どこをどうしますとはお伝えできません。先程の話にもありましたように、この 9 館の図書館を全て継続、全て建て替えというのは、経済的な要因もあって難しい状況です。また一方で、総合管理計画ではインフラも含む全ての施設で面積を 8 割程度にするという市としての目標を立てているということもあります。一旦は必要な面積削減を行いながら、これからこの中央図書館を中心として図書館機能を維持していくということで、再編という言葉を使っています。皆さんに安心・安全に使っていただくことを目標として、空調の工事を順番に実施し、岡町図書館の後、東豊中図書館も半年間の休館期間を終えてやっと開館しました。来年度につきましても、また 2 館が空調の設備や電気の取り換えなどで、相当期間休まざるを得ない状況です。この老朽化への対応も含め、市民の方からいただいた税金を有効に活用させてもらい、今まで皆さんと一緒に作ってきた図書館のサービスを良いかたちで次の世代に残していくことについて、皆さんにも一緒に考えていただきたく、「再編」という言葉を使わせていただきました。

○**司会** 次の質問はおそらく中央図書館ができれば、という内容の質問かと思えます。

質問用紙 2 ビルを建てる時、高さ制限というのはあるのでしょうか。

○**読書振興課** 豊中市の場合は空港があるということで、高さ制限があります。特にこの空港に近いエリアというのは、高さ制限がありまして、何 m 以上の建物は建てられないという設定がされています。実際に中央図書館をこれからどの場所に建てるかは決まっていますが、もし仮に岡町地区を中心とした市の真ん中辺りに建てる場合ですと、ある程度その高さ制限というものを意識しながら、建物の構造・造りについて考えていく必要があると考えております。以上です。

○**司会** その他にも中央図書館でこのような部屋を作ってほしい、このようなスペースがあると良いなど、いろいろなお希望・ご要望・アイデア・夢をいただいております。日頃の活動への感謝などもお寄せいただき、どうもありがとうございます。このようなご意見は、今後の参考にさせていただければと思います。他、何かここまでの間に質問を思いついた方など、いらっしゃいません

でしょうか。

○**質問者 3** 今日あらかじめお出しした質問用紙の中に書かせていただきましたが、ご提示がなかったので伝えさせていただきます。豊中市の学校には早くから司書さんがいらして、全国的にもとても先駆的な学校となっています。新しい図書館を考えるにあたっては、その学校や学校図書館の司書さんなどのご意見をぜひ基本構想に寄せていただいて、組み込んでいただきたいと思います。そういったご意見を聞く場はすでにお持ちでしょうか、これからでしょうか。

○**読書振興課** ご意見ということで承ってしまい、申し訳ございませんでした。学校司書連絡会というかたちで、月に1回岡町図書館に集まる機会があります。その中で、今の状況を随時説明させていただいています。豊中の図書館は司書を全校に配置しておりますので、今後は地域の図書館も含めて、公共と学校図書館とで連携しつつ、子どもたちへのサービス、学校の先生へのサービスのほか、学校と中央図書館の関り方なども含めて、ご意見を聞く場はあると思います。

○**質問者 4** 全く異なる観点からの質問で申し訳ありません。池澤先生、こういった取組みの中で歯がゆいと思われた経験がありましたら、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

○**池澤先生** 今日お話した案件の全てが歯がゆかったです。先ほど話した体育館を低床にするという話も2分程で話しましたが、徹底的に反対されました。学校プールの民営化の時も同じです。何かを変えようとするとは必ず前例がないと言われるので、ストレスはたまっていました。

ただ1つ言えるのは、嘘ではなくて私は楽しかったということです。先ほどの議論のように「こういった図書館にしたい」と言ってもらえることが嬉しいです。設計士からすると、「適当に3,000万円で設計してほしい」と言われるのが1番むなしいです。皆さんにこういう図書館にしたい、こういう夢がある、と言っていたことをどのように現実的なかたちにするかということです。その過程の中で歯がゆい面もあります。そういう意味では、嫌になるという歯がゆさではありませんでした。公共施設マネジメントは、明るく元気に進めないと、暗くネガティブに進めても何も良いものは出てきません。アイデアをどんどん出していってもらえれば良いと思います。いろいろと歯がゆい面はありましたが、ここは公共の場なのでこの程度にしておきます。

○**質問者 4** 先ほど聞いて驚いたのですが、子どもが血だらけになったという話がありました。こうしたことは聞いて初めて分かることで、たくさんあるのでしょうか。ともかく対話を続け、いろいろなことを聞いていくことが1番大切なのでしょうか。

○**池澤先生** その通りだと思います。公務員に対して言うことなのか分かりませんが、やはり否定から入るのではなくて、「もっとこうした方がよいよね、便利かもしれないよね」という議論で進めていくのがコツかとは思いますが。今日はロジックについては触れませんでした。結局のところ、こうした問題は感情論では解決できません。プール民営化も徹底的に数字を押さえ、お金がどれだけ出て、どちらが得か損かということまで全部裏を取ります。感情論に基づく「もっとこうした方がよいよね」という議論は、総論的には皆さん盛り上がります。しかし、果たして実現できるか

となった時にそれができないと、市役所が悪いことになります。今日は建物に関するコストにしか触れていませんが、それと同じだけの金額が実は人件費にかかっています。そういうお金も含めて、公共として持続的に進めていくにはどうすれば良いかが重要です。できるところ、できないところに、どのように落としどころを付けていくか、皆さん冷静になって考えていただきたいと思います。数字できちんと裏を押さえなければなりません。感情論とは別にものすごく冷たくクールに、数字はこうなっていると伝えなければ、ロジカルな議論にはなりません。話を感情論にさせないためには、どんなに嫌いな上司でも、個人的な付き合いはまた別として、ひとまず数字できちんと話をする事です。

公務員的に申し上げると、議会でも「市民のために」とよく言われます。その市民とは何かといういろいろ考えます。哲学的になってしまいますが。こうした施設でいうと、利用者側の市民は市民でいらっしゃいますが、それを維持管理していく負担者側の市民もやはり市民です。公共は両方の市民にとって、全体最適として何が良いかを考えます。先ほど、将来の需要にどのように対応していくかという話がありましたが、財政的にも対応していかなければなりません。負担者側の市民にこれ以上負担をかけないためには、どうすれば良いかも考えなければなりません。それがバランスとして重要です。議会では露骨にこうした表現はされませんが、私は負担者側の市民のことをずっと考えてきました。そこはサイレントマジョリティというところで、ほとんどの方は特に文句がなければ何も意見を言ってきません。アイデアは出してきませんが、「それで良いのではないか」と思っている方は多くいらっしゃる訳です。その方たちに負担を強いらぬよう、どうすれば1番良いのか悩みながら取り組んできました。

1つだけ言いたいのは、今までのハコモノありきのサービスはやめて、まずサービスをどのようにするかを決めて、それを提供する場はこのようにあると良いとなって初めてハコモノを考える方が良いということです。これまでのハコモノ行政、ハコモノを作ればサービスが付いてくるという発想、これだけは私は賛成できないと思います。

○質問4 余談になりますが、今は国会での桜の会のことばかりがテレビで放送されています。私が勉強不足で申し訳ないのですが、あのトンネルの事故以降、国はどのように変わっていったのでしょうか。

○池澤先生 各省庁がインフラ長寿命化計画を進めています。

○質問4 そこに予算が下りていくようになっているのですよね。

○池澤先生 本当は予算が下りていかなければいけないと思います。このようなことを言うのもネガティブですが、日経新聞に「2020 エレベーター問題」が載っていました。日本は1990年代にバブルがはじける前後に公共施設をたくさん作り、その時にエレベーターもとてもたくさん作られました。エレベーターは25年程で取り替える必要があり、計算するとその更新時期は2020年頃です。一斉に全国のエレベーターの改修が始まる訳です。直したくても順番待ちとなることもあり得ます。その時にお金をどのようにきちんと手当するか、全国のことなので、国がどのようにサポー

トするかという問題も出てきます。

2025 問題と言われるように扶助費が圧倒的に上がる時代を日本は初めて迎えます。高齢者の皆さんが圧倒的に増えた時に、どこでどのようにお金を節約するか、もう限られている訳です。多くの場合には、施設に関する維持管理費を下げるなど、ますます危険な方向に向かってしまうため、そこは国と地方がお互いお金をどうするかを協議する必要があります。

○質問者 4 とにかく難しい時代に入っているということですね。

○池澤先生 とても難しい時代です。

○質問者 5 プールの時に血だらけになったという話についてです。その時は先生が気付いたとのことで良かったですが、私たちが見つけた時は、それはどこに持って行けば良いのでしょうか？

○池澤先生 教育委員会だと思います。

○質問者 5 それで通るのかどうかと思います。

○池澤先生 今日は学校の話でしたが、ヒヤリハットは学校に限らずあります。例えばこの施設は外壁がタイルです。未来永劫落ちない訳ではありません。今日の帰りに皆さんの頭に落ちてくるかもしれません。私はたまたま学校のプールのお話をしましたが、それに限らず全国で、例えば看板・外壁が落ちてくることは多々見られます。

市役所も本音で言うと直したいと思っています。ところが、先ほど触れたように全部が古く、ありとあらゆるところが古いもので、全部を一度には直せないというジレンマを抱えています。そこをどのように効率的に直すのか、それは管理者さんに言っていくしかありません。管理者さんの方としては、これからは全面的に直していくという方法はおそらく無理があるので、応急処置的に直す時代になっていくだろうと思います。例えば、外壁のタイル全部を張り替えるお金がないのであれば、落下養生ネットを貼っておくことになります。見た目は良くありませんが、人に落ちて来るよりはましです。3,000 万円の改修費には予算が付かなくても、300 万円のネット費であれば付く可能性があります。利用者側もこうしたことを「それならしょうがないよね」と受容していかなければなりません。「全部直してくれないとだめ」「あれもこれも一気に直して」と言われると、それは難しいと思います。

埼玉県ふじみ野市のプール事故を覚えていますか。市営プールで女の子が排水溝に流されて亡くなりました。あの事故で刑事罰を受けたのは指定管理者ではありません。指定管理者に管理してもらってはいましたが、罰則を受けたのは市の職員でした。そこまで全ては見られる訳がないと思いますが、実際に懲役刑を受けるのは公務員で、相当なリスクを背負いながら施設管理に取り組んでいます。要するに、今の公務員は自分の人生をかけて管理しなければならないのです。安全に関することは、皆さんの方からも「ここはあぶないよ」などと、どんどん情報共有していく社会になっ

てほしいと思います。「早く直せ」と批判するのではなく、「あそこが危険だから早く直した方が
良いのではないか」などと、バリケードを張るなり、コーンを置くなりでも良いので、取り組んで
いってほしいと思います。自分たちの安全を確保することで、第三者の安全も一緒に確保してい
こうという社会になってほしいと思います。安全を市民と行政が共同で管理していくという社会に、
です。

少し前までは問題ありませんでしたが、いよいよ日本はどの施設をとっても危険な時代となっ
ています。建物だけではなく、橋だってそのうち落ちるかもしれません。道路も直してほしいと言
われていますが、歩道もこのような状況です。街路樹も以前は度々切っていたのに、今はだいぶ切
らなくなっていないですか。草が生えてくるまで放置していますよね。街路樹が伸びて前方が見えな
くなると交通安全に支障が出るにも関わらず、です。昔と比べてずい分お金がなくなってきている
時代の中で、どのように生きていくかをお互いに作っていく必要があります。負担者側の市民と利
用者側の市民が、どのように持続可能な社会を作り上げていくかがカギだと思います。個人的には
子どもは絶対守ろう、学校・保育園などで危険がないようにしてあげようと思っています。管理者
に伝えていくしかないと思います。

〈4. 質疑 終了〉

5. 閉会～アンケート記入

○司会 ありがとうございます。時間もそろそろ過ぎそうになっておりますので、こちらで質問
を締め切らせていただきます。皆さま、今日は本当にありがとうございました。池澤先生へ、温か
い拍手をお願いいたします。

本日はお忙しい中お越しいただきまして、どうもありがとうございました。今日受付でアンケー
トをお配りさせていただいておりますので、お時間よろしい方は書いていただいた上で、帰りに渡
していただければと思います。どうもありがとうございました。お疲れさまでございました。

〈5. 閉会～アンケート記入 終了〉